

場所の論理から見た日本語の論理

岡 智之 (東京学芸大学)

はじめに

本稿では、「日本語の論理の基本は、場所の論理である」ということを主張する。まずは、論理として、「主語論理と述語論理」「主体の論理と場所の論理」があることを述べ、その思考方式について詳しく述べる。そして、最近の日本語の論理に関する論考である月本 (2009) の「日本語の論理の基本は、命題論理、すなわち形式論理である」という主張を批判的に検討し、日本語の論理について再考してみたい。

1. 主体 (主語) の論理と場所 (述語) の論理

一般に理解されている論理というのは、アリストテレスに始まる古典論理であり、それが現代の形式論理学につながっている。これに対し、西田幾多郎は、判断の形式から出発し、従来は主語中心であったものを、逆方向で述語中心に考えるべきであるとして「述語の論理」=「場所の論理」を提唱した。本稿では、積極的にこれを支持し、場所の論理の有効性を主張したい。

まず、城戸 (2003) にしたがって、主語論理と述語論理、主体の論理と場所の論理について概略する。

まず、「主語論理」とは、個々の主体または客体 (存在者) から出発し、そうした主体または客体がおかれている所在=場所=述語をその主語に属する性質として論じる論理である。たとえば、「太陽は輝く」という文では、太陽という主語が輝くという性質を有すると考える。太陽という主語がまずあって、この主語に包摂されるものとして輝くという性質を述定するのである。これに対し、「述語論理」は、所在=場所=述語から出発し、その場所において包み込まれる主体や客体 (存在者) について論じる論理である。例えば、「輝く」という所在=場所から出発し、輝くものが包摂するものを同一のものとして論じるのである。主語論理からすれば、女性と太陽は、主語、主体としては明らかに異なるものである。しかし、輝くという述語的同一性のもとで見ると、女性も太陽も輝くものであり、「太陽は輝く」、「女性は (男性にとって) 輝く」故に、「女性は太陽である」という結論を導く。一般にメタファー (隠喩) は述語論理に従っている。述語論理は、言語以前のイメージの同一性を重視する論理である。また、述語論理は主語論理よりも基底的、根底的な論理であり、意識を形成するのが主に主語論理であるとすれば、無意識を形成しているのは主に述語論理なのであるとする。「主語論理」と「述語論理」は主に判断の形式から出発して導き出されたものであるが、それを広く見るならば、「主語論理」は「主体の論理」に含まれ、「述語論理」は「場所の論理」に含まれる。

「論理は思考の形式である」とすると、「主体の論理」と「場所の論理」に対応するそれぞれの思考方式が存在するだろう。それを「主体的思考」「場所的思考」とする。城戸 (2003) では、それらは具体的にどのような形で二項対立的に把握することができるとしている。(実際は⑩まであげられているが、⑧までにしておく。)

	場所的思考に属する思考	主体的思考に属する思考
①	非言語的	言語的
②	実践的	理論的
③	レトリック	ロジック
④	帰納法	演繹法
⑤	経験論	合理論
⑥	こと (事)	もの (物)
⑦	イメージ	概念
⑧	右脳的	左脳的

表1 場所的思考と主体的思考 (城戸 2003:119-120)

これらを城戸に従いながら説明していく。

- ① 非言語的と言語的は、⑦のイメージと概念と関係してくる。すなわち、イメージは非言語的であり、概念は言語的である。イメージの同一性から概念が生まれる。たとえば、「犬」という概念は、「ワンワンほえる動物」をたくさん見て、それから作られるイメージの同一性に基づいて、作り出されるのである。これは認知言語学でいう、カテゴリー化ということとも関係している。
- ② 実践的と理論的は③と関係してくるが、レトリックは人を動かす説得術として発展したものであり、きわめて実践的なものである。これに対し、ロジックはまさに理論的なものである。
- ③ レトリックとロジック…レトリックは、具体的なものを通しての場所的同一性に基づく説得であって、基本的に場所の論理に基づくものである。レトリックは、主語論理的には非論理的だが、述語論理的には十分論理的根拠を持っているものである。レトリックのうち、隠喩は、異なるものの中に同一性を見いだす思考方式であり、主語的に異なるものが場所的 (述語的) に同一性を見いだすときに使用される表現形式である。また、換喩は、近接関係に基づく連合関係であり、言語以前の動物にも見られる推論形式であるという。

- ④ 帰納法と演繹法…帰納法は、人間の五感によって捉えられる個々のケースから出発し、そこから一般的な真理あるいは概念に到達する推論で、述定される場所の同一性に基づく推論形式である。一方、演繹法は、形式論理の三段論法に見られるような命題の必然的結果を導き出す推論であり、主語的論理に基づいた推論である。また、城戸ではあげられていないが、パースによって定式化されたアブダクション（仮説推論）は、規則と所与の結果から文脈を参照して事例に関して行う推論であり、これも一種の述語論理的推論（帰納法よりも高次の推論であろう）であると考えられる。アブダクションは、説明のための仮説を主体的、創造的に作り上げるプロセスであり、認知心理学や人工知能などにおいて仮説形成、自然言語処理のプロセスとして研究されている（辻編 2002:4、米盛 2007）。帰納法やアブダクションに見られる推論方式はきわめて実践的であり、述語論理は日常的にも有効な論理と考えられるべきである。
- ⑤ 事と物…主語論理は、実在するのは物であり、その物が主体となり、これを述定するのが言語であると理解する。これに対し、場所の論理では、あるのは動的な現実であり、その現実が、物によって構成されているのではなく、事によって作られていると考える。本来は「こと」があり、この「こと」を分析的に見ることによって、初めて「もの」が見えてくるのであって、その逆ではない。物を中心とする世界観はモノ的世界観であり、事を中心とする世界観はコトの世界観である。英語の基本的見方は、モノ的であり、日本語では、コト的であることが池上（2000）などでも指摘されている。
- ⑥ イメージと概念…イメージとは、ことばと概念の形成に先立って存在する心的表象である。「稲妻の光とものすごい落雷音」という身体経験に基づいて、そのイメージが作られ、それを主語的に統一するものとして「雷」という言語が形成される。イメージは動物も持つが、概念を動物が持つかはよくわからない。基本的には、イメージは言語以前の（動物も持つ）表象であり、概念は言語によって形成されると考えておく。イメージの同一性に基づく論理が述語論理であり、「概念」や「ことば」による主語的同一性に基づく論理が主語論理である。ここで、認知言語学で言うイメージ・スキーマの位置づけを考えておこう。イメージ・スキーマは、種々の身体経験をもとに形成されたイメージを、より高次に抽象化・構造化した知識形態とされる。日常的な食べたり、出したりという行為や部屋を出入りするというような身体経験が、身体を容器のようなものとイメージさせ、その容器のイメージ・スキーマが形成される。イメージ・スキーマは、メタファーの認知的基盤になることから、述語論理的思考が関係していると考えられる。（単なるイメ

ージ的同一性による推論よりもより高次の推論において使われるものと思われる。）

- ⑦ 右脳的思考と左脳的思考…ヒトにおいては、左脳では言語的思考が優位に行われ、反対の右脳では非言語的な機能が優位に営まれている。一般に左脳的思考は主体的思考、右脳的思考は場所的思考に関係していると言えるだろう。月本（2008:206）では、右脳に損傷がある子供は、通常のことばは理解できるが、ジェスチャーができないとか比喩が理解できないという報告をあげている。ジェスチャー自身は思考ではないが、ことばのイメージの表現に近いし、比喩は場所的思考であることから、右脳思考が場所的思考に関係していることが伺える。そして、この右脳を経由して、左脳でことばを処理できるようになるという事実は、主体的思考が場所的思考に基づいていることを証明しているものではないだろうか。

このように、主体的思考と場所的思考は二項対立的に存在すると共に、相補的關係であるとも言える。場所的思考が基底的で、主体的思考があるという関係である。そして、これら場所的思考と主体的思考が形式化されたものが、「主体の論理」と「場所の論理」となるのである。

これらの論理が、現実の言語現象にどう現れているかまず、確認しておこう。次のような a、b のような対比があったとき、どちらをより自然な使い方として、見るかである。

- a. 風が窓をひらいた。（主体—対象—動作）
 <主語—目的語—他動詞>
- b. 風で窓がひらいた。（場所—出来事）

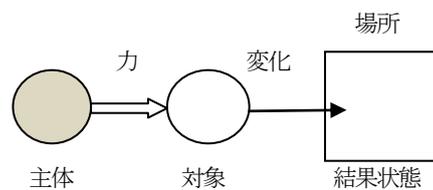


図1 他動詞構造

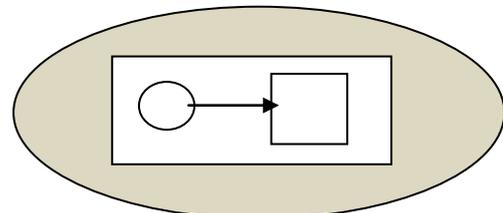


図2 場所で出来事が起こる

英語や中国語などの言語では、a のような言い方が自然であり、日本語や朝鮮語のような言語では、b のような言い方が自然であるという。a の「風」のような無生物を主語にすることは日本語では、「擬人法」のように特別な効果を生む場合のほかは、普通の発話では使いにくい。この言い方を自然とする言語は、「無生物」をも主語にする「主語の論理」、「主体の論理」が強い言語

であろう(図1)。一方、bでは、「風で」の「で」は一般には「原因」と解釈されるが、ここでは「風の中で」というように場所的にも解釈できるであろう。すなわち、「風の中で、「窓がひらく」という出来事が起こった」という解釈ができる(図2)。まさに、「場所において、コトがナル」という事態認識であり、こうした言い方を自然とする言語は、「場所の論理」が強い言語であるといえるだろう。

ここで注意すべきは、「場所と主体(個体)」の関係は、どちらがなくても、あり得ない相補の関係である。「存在物」だけあって、それがある「場所」がないと言うことはあり得ないと同時に、「場所」だけあって、「個体」がないというのは、空虚な空間、無でしかないであろう。現実には、両者は相補の関係にあるものである。ただ、「場所の論理」の方が根源的であり、それを基盤として「主体の論理」があることはいえるだろう。

これを日本語と英語の場合で、図式的に書けば次のようになるのではないと思われる。

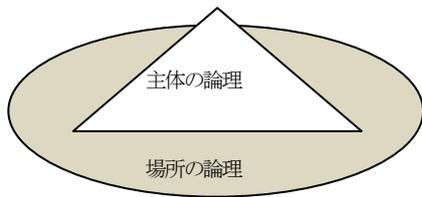


図3 英語の論理

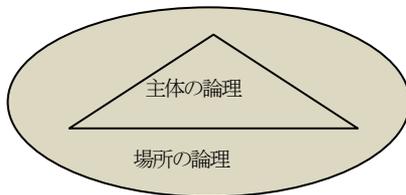


図4 日本語の論理

英語では、主体の論理が強く、主体は場に独立した形で存在する。それゆえ、言語構造としては主語を必要とし、事態の基本型はスル型(主体-対象-他動詞)、事態把握としては、主体が場の外から見る客観的把握である。

一方、日本語では、場所の論理が強く、主体は場に依存して場に埋め込まれた形で存在する。それゆえ、言語構造としては主語を必要とせず、事態の基本型はナル型、事態把握は場の中に視点を持つ主観的把握である。

安藤(1986)も、西欧と日本の文化の型の対立を、「個の論理 vs. 集団の論理」と言ってもいいとしているが、これはまさに、「主体の論理」と「場所の論理」と並行的に捉えられるものである。結局、日本語の論理は基本的に場所の論理であり、英語の論理は基本的に主体の論理であるといっているであろう。

2. 日本語の論理は形式論理であるか?

月本(2009)の主張は、「日本語は論理的であり、その日本語

の論理は特殊でもない。日本語の論理は形式論理と同等である」というものである。まず、「日本語は非論理的である」という説は、月本氏と同じく誤っていると考えるし、「日本語の論理は特殊ではない」という主張も賛成である。しかし、「日本語の論理は形式論理と同等である」という主張には、疑問がある。

月本氏の論法は、次のようである。

- ① 論理は比喩の形式である。
- ② 日本語の論理の基本は容器の論理である。
- ③ 命題論理は容器の比喩の形式である。
- ④ ゆえに日本語の論理の基本は命題論理である、すなわち形式論理である。

結論的に言って、①は誤り、②は条件付き賛成、③は部分的賛成、④は反対である。これらの主張と論法に対してひとつずつ反論していく。

2.1 「論理は比喩の形式である」か

月本氏はここでいう「比喩の形式」を比喩の持つ共通性、すなわちイメージであるとしている。しかし、「形式」と「イメージ」は同じであろうか。たとえば、「私の心は満たされない」というとき、心を容器に喩えているのであり、「心は容器である」という比喩が使われている。こうした、容器の比喩を形式化したものは、「Xは容器である」という命題であろう。「比喩の形式」とは、「AはBである」という命題で言い表されるものではないだろうか¹⁾。月本氏は、「形式」と「イメージ」を同一視しているが、「形式」と「イメージ」とは異なると考えられる。月本氏のいう「イメージ」は、認知言語学でいう「イメージ・スキーマ」に近いものと考えられるが、たとえば、「容器のスキーマ」とは、容器の中に何かが入っているイメージをスキーマ化(形式化ではない)したものである。これは普通図示されるものであり、「形式」とは普通、命題や記号、式で言い表されるものではないだろうか。月本氏は、「比喩の形式」と「比喩のイメージ」を混同していると思われる。すなわち、「容器の比喩」とは、「Xは容器である」と形式化できるものであるが、それと「容器のスキーマ」は異なる。厳密に言えば、日常生活における経験が「容器のイメージ・スキーマ」を形成し、それに基づいて、「容器の比喩」が生まれるのである。

月本氏は「比喩の形式」は思考の形式である。「論理」も思考の形式である。ゆえに、「論理は比喩の形式である」と結論づけている。「比喩の形式」は思考の形式である、という大前提は「比喩を通して、思考している」という言い方でなら納得できるが、「形式」は余計である。この大前提を正しいとしても、この推論自体、古典論理の三段論法からすれば誤りである。典型的な三段論法は次のようなものである。

- すべての人間は死ぬ。(大前提)
 ソクラテスは人間である。(小前提)
 故に、ソクラテス(S)は死ぬ。(結論)

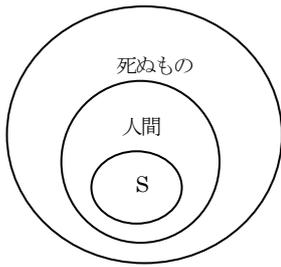


図5 三段論法の図式

古典論理では、図5のような包含関係が成立するからこそ、「ソクラテスは死ぬ」という結論が導き出されるのであるが、月本氏の論法は、古典論理では、図6のような図式になるので、「論理は比喩の形式である」という結論は導き出せない。

比喩の形式は思考の形式である。(大前提)
論理は思考の形式である。(小前提)
ゆえに、論理は比喩の形式である。(結論)

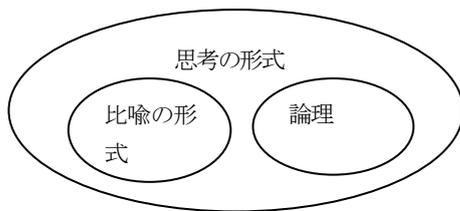


図6 「論理=比喩の形式」ではない

月本氏は、容器の比喩の形式は「容器の論理」、擬人の比喩の形式を「主体の論理」と呼ぶとしているが、直感的に言っても、「比喩」と「論理」は別々のものである。したがって、「論理は比喩の形式である」という前提は誤りである。

2.2 「日本語の論理の基本は命題論理である」か

③の主張であるが、命題論理における「かつ」「または」という接続関係や「でない」の否定関係は、すべてベン図を使った包含関係で図示できる。それゆえ、命題論理は「容器のスキーマ」に基づいているといえる。しかし、ここには「容器の比喩」自身は見られないのである。(「pかつq」がベン図で示せたとしてもそれ自体は比喩ではない) だから、命題論理が「容器の比喩」に基づくとは言えない。

①「論理は比喩の形式である」という主張が誤りとした以上、「比喩の形式」という言葉は使わないことにするが、仮に③を「命題論理は容器の論理である」として、②と合わせて④の結論が導き出されるだろうか。

日本語の論理の基本は容器の論理である。
命題論理は容器の論理である。
故に、日本語の論理の基本は命題論理である。

この推論も三段論法からすれば誤りである。もしこれが三段論法的推論ではなく、「XはYである」を $X=Y$ という等号関係と考えてこのような結論を導き出しているとしても、「命題論理は容器の論理である」自体がそもそも誤りであるからこの推論自体が誤りになるのである。

命題論理は日本語の接続詞の規則に基づいて作られているものであるから、日本語で命題論理が扱えるのは当然のことである。それゆえ、「命題論理は、日本語の論理に合致する」とは言えても、逆に「日本語の論理は命題論理である」とは言えない。せいぜい、命題論理は、日本語の接続の規則を形式化したものにすぎないと思われる。

3. 結論

命題論理は場所の論理に基づいている。述語論理も場所の論理に基づいているとすれば、命題論理と述語論理の複合である形式論理学も、場所の論理に基づいているのである。形式論理学自体は、主語論理的であるが、その根底では、場所の論理が働いていると言うことである。

月本氏の「日本語は論理的である」という主張は賛成である。しかし、その論拠として、形式論理を持つてくるのは疑問である。形式論理では、現実の人間の思考や推論は必ずしも取り扱えないのである。日常の推論として働く述語論理のような論理を認める必要がある。またアブダクションなどの推論や比喩的思考を述語論理の高次な形式として位置づけ論じていくことは今後の課題になる。

¹ 「比喩の形式」と一言で言うが、ここでは、「隠喩(メタファー)の形式」のことである。瀬戸(1995:15)では、「メタファーの形式」として、「AはBである」(「男は狼である」)のデアル型、「AのB」(「仕事の山」)の連結型、「美しい理論」のような形容詞型、「東京砂漠」の名詞型、「新しい分野を開拓する」の動詞型、「一枚岩にひびが入った」をメタファーとして使う場合の文型などに区別されるとしている。

参考文献

- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究』大修館書店。
池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社。
岡 智之 (2011) 「日本語の論理再考—場所の論理と形式論理—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系II』第62集
城戸雪照 (2003) 『場所の哲学—存在と場所』文芸社
瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』海鳴社
辻幸夫編 (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社
月本 洋 (2008) 『日本人の脳に主語はいらない』講談社
——— (2009) 『日本語は論理的である』講談社
中村雄二郎 (1989) 『場所—トポス』弘文堂
米盛裕二 (2007) 『アブダクション—仮説と発見の論理』勁草書房。